

2017年(平成29年)

3月31日

金曜日



医療や介護の需要減らせ

10年前から日本は人口減少社会に突入している。昨年は130万人が亡くなり、こどもは100万人しか産まれなかった。30万人が減ったことになる。

超高齢社会の課題とは、実は少子化に本質が潜む。女性が一生の間に産むこどもの数、合計

太田秀樹 12

人生支える在宅医療

とちぎの風



おた・ひでき 1953年、奈良市生まれ。自治医大大学院修了。92年「おやま城北クリニック」開業。現在は医療法人アスムス理事長として在宅医療を推進。

特殊出生率は1・4ぐらいで改善の兆しに乏しい。こどもを産んで育てるのに適した年齢の男女6人から、こどもが4人しか産まれてこないのである。

もはや、人口の減少を食い止めることは絶望的で、労働力人口より高齢者人口のほうが多く、2040年の推計値では年間170万人が死亡、100万人単位で人口が減少する。わずか2年で栃木県が消えてしまう規模だ。団塊ジュニアたちも高齢

者の仲間入りである。だから、医療・介護専門職がもっと必要だと医学部などの定員が増えた。現在、医師、歯科医師1万2千人。看護師6万5千人。理学療法士、作業療法士、言語聴覚士1万5千人。薬剤師1万人。介護職も合わせると十数万人が毎年誕生することになる。同級生の10人に1人が医療・介護に携わる計算である。

だが需要に応じて養成するのではなく、需要そのものを減らすべきだ。例えば寿命が近づく時の望まれない人工栄養を見直す、医療も介護も負担が軽減されるはずだ。(次回4月7日)